

平成 23 年 5 月 23 日現在

研究種目： 基盤研究(B)
 研究期間： 2007～2009
 課題番号： 19310159
 研究課題名（和文） 複合国家イギリスの社会変動と宗教に関する地域史研究：学際的アプローチ
 研究課題名（英文） The Area Study of a multi-national British Composite State during the early modern period: Social Changes and Religion
 研究代表者
 岩井 淳 (IWAI JUN)
 静岡大学・人文学部・教授
 研究者番号： 70201944

研究成果の概要（和文）：ブリテン諸島の歴史は、これまでイングランド史を中心に営まれてきた。しかし、最近の研究は、イングランドだけからイギリス史を見ることを反省し、ウェールズやスコットランド、アイルランドといった多様な地域が交錯する場として「ブリテン史」を考察するようになってきている。本研究は、複合国家イギリスの地域的展開において重要な画期である、ピューリタン革命前後の時代に着目し、多様な民族からなる各地域が、この時期に、それ以前とは比べ物にならないほど緊密で複雑な関係を取り結び、複数の国からなる「ブリテン国家」が「複合民族国家」として、また植民地までも含む「ブリテン帝国」として姿を現す過程を検討した。本研究は、多様な地域だけでなく、政治史や宗教史、文化史、社会史、都市史、政治思想史、宗教思想史という多面的アプローチを行っており、そうした手法を駆使して複合国家イギリスの特質を明らかにしたという意義をもっている。

研究成果の概要（英文）：The British Isles is a multi-national arena, but its history has traditionally been studied from an English - often, indeed, a London - perspective. Today, however, the interweaving of the distinct but mutually dependent histories of the four nations (English and Welsh, Scottish, Irish nations) has become one of the most lively and productive areas of current research. This project makes its own contribution to that research. Its subject is the processes by which the various Celtic and English inhabitants of the British Isles were gradually brought together into a multi-national British composite state during the early modern period, especially the Puritan Revolution.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	5,500,000	1,650,000	7,150,000
2008年度	4,500,000	1,350,000	5,850,000
2009年度	4,500,000	1,350,000	5,850,000
年度			
年度			
総計	14,500,000	4,350,000	18,850,000

研究分野：西洋近代史

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：①複合国家 ②ブリテン帝国 ③ブリテン革命 ④ピューリタン革命 ⑤宗教

1. 研究開始当初の背景

共同研究「複合国家イギリスの社会変動と宗教に関する地域史研究：学際的アプローチ」は、2007年度から2010年度まで4年間にわたり継続された(2010年度は、2009年度の研究課題の繰越が承認された)。

本研究課題の構成員は、研究代表者と研究分担者の多くが参加する「イギリス革命史研究会」を母体に組織された。この研究会は、1975年に中央大学教授の田村秀夫を中心に設立され、現在も多数の中堅・若手研究者を集めて活動を続けている。研究会の研究成果は、田村秀夫編『イギリス革命と千年王国』(同文館出版、1990年)、田村秀夫編『クロムウェルとイギリス革命』(聖学院大学出版会、1999年)、田村秀夫編『千年王国論』(研究社出版、2000年)という三冊の共同研究において発表された。

研究開始当初の背景として重要なのは、革命史研究会の共同研究の中に、すでに本研究課題と密接に関係する論点が打ち出されていたことである。すなわち第一に、『イギリス革命と千年王国』『千年王国論』で見られるように、第一次史料を用いて、17世紀イギリスの実証的研究を行い、ピューリタン革命という社会変動を宗教思想の視点から考察することである。第二に、『クロムウェルとイギリス革命』で見られるように、17世紀イギリス史をイングランドだけでなく、スコットランドやアイルランド、海外植民地、ヨーロッパ大陸との関係から理解することである。この二つの視点は、現在の欧米の学界でも強く意識されるものであり、これらを総合する形で、本研究課題は成立した。

思い起こすと、研究代表者を務める岩井淳がロンドン大学に留学した2004年ころ、多様なセミナーや学会に顔を出し、この上なく刺激を受け、新しい研究状況に対応した研究会の立ち上げの必要性を痛感した。岩井は、明治学院大学の大西晴樹とメールで連絡をとりながら、科学研究費に基づく新たな共同研究を構想した。岩井が帰国すると、大西とともに研究会結成の準備に取り掛かり、イギリス革命史研究会の会員を中心に、研究分担者となるメンバーに声をかけた。

ようやく2007年4月になって朗報が届き、本研究課題は採択された。当初は、地の利を生かすため、明治学院大学の大西が研究代表者を務めたが、初年度にあたる2007年秋、大西の明治学院大学学長への就任が決まったことから、事態が一変した。2008年4月に大西はメンバーから離れ、代わって静岡大学

の岩井が研究代表者を務めることになった。研究会発足時の分担者は10名であったが、学長となった大西以外にも、明治学院大学の副学長となった松井清、2008年3月13日に病気のため逝去した小野功生(当時はフェリス女学院大学教授)の3名が離脱を余儀なくされた。わけても小野の逝去は、共同研究全体にとって大きな痛手であった。

このように本研究は、要職への就任や不幸な出来事に見舞われ、1年目は多難の船出となった。しかし、その後の3年間は順調に共同研究を重ねることができた。

2. 研究の目的

本研究は、複合国家イギリスの地域的展開を社会変動と宗教という観点から追究するものである。従来のイギリス史研究は、民族的にも国家的にも、アングロ・サクソン民族やイングランドを中心とし、イングランド史を主権国家の形成史と見る傾向が強く、複合民族国家の成立過程をとらえる視点は希薄であった。しかし、現在の連合王国は多数の民族集団や宗教集団から成り立っており、そこに至る過程を民族的・宗教的対立と協調の歴史、複合国家の成立過程としてとらえる地域研究は今日的関心からいっても、必要不可欠になっている。

本研究は、複合国家イギリスの地域的展開において重要な画期となった社会変動の時期である17世紀のピューリタン革命前後の時代に着目した。なぜ、17世紀かと言うと、イングランド、ウェールズ、スコットランド、アイルランドという多彩な地域からなるブリテン諸島が、この時期に従来とは比べ物にならないくらい、緊密で複雑な関係を取り結び、複数の国からなる複合民族国家としての「ブリテン国家」が、さらに植民地までも含む「ブリテン帝国」が次第に姿を現したからである。

このような理由から、本研究は、複合国家イギリスの地域的展開を社会変動と宗教という観点から追究することを目指した。

3. 研究の方法

研究代表者と分担者の計7名は、これまで広い意味でイギリス近世史の研究に従事してきた。複合国家イギリスの地域的展開を考察するには、イングランド史だけでなく、ウェールズ史、スコットランド史、アイルランド史、国際関係史の英知を結集し、研究会を組織する必要があった。従来、日本ではイン

グランド史以外の地域研究は手薄であったが、本研究に参加した7名は、分担して多様な地域を考察し、定期的に関われる研究会において、各人の知見を総合するように努めた。以下、各人の分担範囲を記すと、次のようになる。

岩井：イングランドとウェールズ
富田：イングランドとスコットランド
那須：イングランドとスコットランド
菅原：イングランドとアイルランド
中川：イングランドと国際関係
山田：イングランドとフランス
西村：イングランドとアメリカ

また7名の専門分野は、イギリス近世史を基本としながら、様々な専門領域に属しており、17世紀の複合国家の地域的展開を、多様な専門領域から考察することができた。以下、各人の専門領域を記すと、次のようになる。

岩井：イギリスの宗教史と政治史
富田：スコットランド政治史
那須：イギリス文化史
菅原：イギリス社会史
中川：イギリス都市史
山田：政治思想史
西村：宗教思想史

このように地域分担を定め、多様な専門領域から、複合国家イギリスの地域的展開を社会変動と宗教を考察したことが、本研究の方法上の特色である。

4. 研究成果

研究代表者と分担者の7名は、研究課題の遂行に全力で取り組んできた。共同研究の主たる成果は、複合国家イギリスの地域的展開を宗教と社会変動という視点から追究した研究書(岩井淳編『複合国家イギリスの宗教と社会』)に発表される。この書物は、2011年度にミネルヴァ書房から刊行の予定である。これ以外の研究成果として、共同研究のメンバーを中心に各地で研究会を開催したこと、および2009年6月に科学研究費補助金によってハーヴァード大学歴史学部のデイヴィッド・アーミテッジ教授を招聘し、各地で公開の研究会・講演会を開催したことを挙げることができる。

以下、科研メンバーを中心にした研究会とアーミテッジ教授の研究会・講演会の概要を記しておきたい。研究会は、メンバーが日本各地の大学に勤務していることもあって、各地で開催された。刺激的な報告をしていただいた上、研究会開催にもご協力いただいたゲスト・スピーカーの方々には、大変お世話になった。

- ・第一回研究会(2007年8月25・26・27日、於・札幌学院大学)
報告者・岩井淳、富田理恵、菅原秀二、中川順子、山田園子、西村裕美、大西晴樹、松井清
- ・第二回研究会(2007年12月22日、於・京都大学)
報告者・坂本優一郎(ゲスト・スピーカー、当時は京都大学)、小林麻衣子(ゲスト・スピーカー、立教女学院大学)
- ・第三回研究会(2008年9月24・25・26日、於・新札幌アーキシティホテル)
報告者・富田理恵、那須敬、中川順子、山田園子、平体由美(ゲスト・スピーカー、札幌学院大学)
- ・第四回研究会(2008年12月21・22・23日、於・広島大学)
報告者・岩井淳、菅原秀二、山田園子、西村裕美、井内太郎(ゲスト・スピーカー、広島大学)、小澤耕(ゲスト・スピーカー、当時は広島商船高等専門学校)
- ・第五回研究会(2009年9月20・21・22日、於・東北大学)
報告者・富田理恵、那須敬、中川順子、西村裕美、川名洋(ゲスト・スピーカー、東北大学)
- ・第六回研究会(2009年12月20・21・22日、於・熊本大学)
報告者・岩井淳、富田理恵、那須敬、菅原秀二、中川順子、山田園子、西村裕美
- ・第七回研究会(2010年4月17日、於・明治学院大学、イギリス革命史研究会例会として公開研究会の形をとる)
報告者・岩井淳、菅原秀二、西村裕美
- ・第八回研究会(2010年6月12日、於・青山学院大学、イギリス史研究会例会として公開研究会の形をとる)
報告者・岩井淳、那須敬、菅原秀二、西村裕美
- ・第九回研究会(2010年9月19・20・21日、於・明治学院大学)
報告者・岩井淳、那須敬、菅原秀二、中川順子、山田園子、西村裕美

この間、研究代表者の岩井と分担者の菅原は、ハーヴァード大学歴史学部のデイヴィッド・アーミテッジ教授を日本に招聘するため、2008年9月に渡米した。ハーヴァード大学近くで会談に応じてくれた教授は、快く来日を承諾した。2009年6月には、科学研究費補助金によるアーミテッジ教授の招聘が実現し、六回にわたり各地で研究会・講演会を開催することができた。教授は、政治思想史、ブリテン帝国史、アメリカ史を専攻する研究者で、日本では *The Ideological Origins of the British Empire*, Cambridge: Cambridge University Press, 2000 [平田雅博・岩井淳・

大西晴樹・井藤早織訳『帝国の誕生——ブリテン帝国のイデオロギイ的起源』日本経済評論社、2005年]の著者として知られる。初来日となった教授は、圧縮されたスケジュールの中で、精力的に研究会と講演会をこなし、日本人研究者と親睦を深め、学部学生の質問にまで丁寧に応えてくれた。全日程に同行した岩井は、その誠実な人柄と疲れを知らない体力に驚嘆を禁じえなかった。研究会・講演会を開催するにあたって、各大学や学会からは様々な援助をいただき、便宜を図っていただいた。コメントや司会においても、多くの方々からご協力をいただいた。アーミテッジ教授をはじめ、お世話になった関係者には心より御礼申し上げたい。共同研究のメンバーは、それぞれ研究会や講演会に参加し、学問的な議論を通して、アーミテッジ教授と交流することができ、非常に有益であった。その日程と内容は、以下の通りである。

- ・研究会(2009年6月19日、於・青山学院大学、青山学院大学文学部と共催)「帝国の理論家ジョン・ロック？」(コメント・下川潔、三浦永光、司会・岩井淳)
- ・講演会(2009年6月20日、於・聖学院大学、日本ピューリタニズム学会研究大会と共催)「17世紀イングランドにおける内戦の思想」(司会・岩井淳、佐野正子)
- ・研究会(2009年6月23日、於・京都大学、京都大学経済学部と共催)「帝国の理論家ジョン・ロック？」(コメント・山田園子、野原慎司、門亜樹子、司会・田中秀夫)
- ・講演会(2009年6月25日、於・静岡大学、静岡大学人文学部と共催)「グローバル・コンテクストから見たアメリカ独立革命」(コメント・上杉忍、司会・岩井淳)
- ・講演会(2009年6月26日、於・上智大学、上智大学アメリカ・カナダ研究所と共催)「グローバル・コンテクストから見たアメリカ独立革命」(司会・増井志津代)
- ・研究会(2009年6月27日、於・青山学院大学、青山学院大学文学部と共催)「『帝国の誕生——ブリテン帝国のイデオロギイ的起源』から10年」(コメント・平田雅博、小林麻衣子、司会・岩井淳)

このうち、「帝国の理論家ジョン・ロック？」は、アーミテッジ教授の加筆・訂正をへて、Sankar Muthu(ed.), *Empire and Modern Political Thought* (Cambridge, 2010)に掲載された。その翻訳が、デイヴィッド・アーミテッジ著、平田雅博訳「帝国の理論家ジョン・ロック？」『青山学院大学文学部紀要』第51号、2009年である。また、「17世紀イングランドにおける内戦の思想」(Ideas of Civil War in Seventeenth-Century England)は、教授の加筆・訂正をへて、英文で『ピュ

ーリニズム研究』第4号、2010年に掲載された。「グローバル・コンテクストから見たアメリカ独立革命」は、近著 David Armitage, *The Declaration of Independence: A Global History*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2007 [平田雅博・岩井淳・菅原秀二・細川道久訳『独立宣言の世界史(仮題)』ミネルヴァ書房として刊行予定]のエッセンスであった。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計15件)

- ① 岩井淳 「大反乱」から「ブリテン革命」へ『イギリス哲学研究』34号、査読有、2011年、97-105.
- ② 岩井淳 「オリヴァ・クロムウェル研究の新動向」『静岡大学人文論集』60号-1、査読無、2009年、33-50.
- ③ 山田園子 「ジョン・ロックのエドワード・ステイリングフリート論—復古体制危機時の教会論をめぐる一史料(下)」『広島法学』33号-3、査読無、2009年、99-134.
- ④ 山田園子 「ジョン・ロックのエドワード・ステイリングフリート論—復古体制危機時の教会論をめぐる一史料(上)」『広島法学』33号-2、査読無、2009年、199-284.
- ⑤ 中川順子 「17世紀前半のイングランドにおける帰化取得者とデニズン」『熊本大学文学部論叢』100号、査読有、2009年、69-80.
- ⑥ 山田園子 「エドワード・ステイリングフリートの教会論(下)」『広島法学』32号-4、査読無、2009年、1-24.
- ⑦ 山田園子 「エドワード・ステイリングフリートの教会論(上)」『広島法学』32号-3、査読無、2008年、1-14.
- ⑧ 山田園子 「ジョン・ロックと復古体制危機」『広島法学』32号-2、査読無、2008年、1-22.
- ⑨ 那須敬 「言語論的転回と近世イングランド・ピューリタン史研究」『史学雑誌』117巻7号、査読有、2008年、83-96.
- ⑩ 岩井淳 「千年王国」「帝国」「ピューリタン革命」事典大項目『イギリス哲学・思想事典』研究社、査読有、2007年、336-338、374-377、435-438.
- ⑪ 西村裕美 「キューカー」事典大項目『イギリス哲学・思想事典』研究社、査読有、2007年、121-122.
- ⑫ 山田園子 「国教会」「宗教改革」事典大項目『イギリス哲学・思想事典』研究社、査読有、2007年、180-183、261-264.
- ⑬ 菅原秀二 「公共性」「ジェントリ」「ピューリタニズム」事典大項目『イギリス哲学・思想事典』研究社、査読有、2007年、165-168、199-201、431-434.

- ⑭ 山田園子「ホッブズとイギリス革命」『思想』996号、査読有、2007年、132-148.
- ⑮ Rie Tomita, “Seventeenth Century Revolutions in Scottish Parliamentary Acts”, in Proceedings of the Second Korean- Japanese Conference of British History, Intellectual Framework, Education and Birth of 'History', The Haskins Society Journal, Volume 2, 査読無, 2007, pp. 9-22.

[学会発表] (計5件)

- ① 山田園子『『ロック政治論集』翻訳から思うロック研究の今後』『日本政治学会2010年度研究会・分科会C7「翻訳と政治思想史研究」(招待講演)』2010年10月10日、中京大学.
- ② 西村裕美「近世人ウィリアム・ペンの「聖なる実験」—ペンシルヴェニア植民にみる非武装平和主義と先住民」『第61回キリスト教史学会大会』2010年9月11日、宮城学院大学.
- ③ Junko Nakagawa, “The image and the reality of the ‘Poor Palatines’ in early eighteenth-century London”, British Society for Eighteenth-Century Studies 38th Annual Conference, St. Hugh’s College, Oxford, 7th January 2009.
- ④ 富田理恵「歴史のなかのスコットランド-イングランド関係」『第32回日本イギリス哲学会研究大会 シンポジウムI イングランド-スコットランド合同のインパクト—合同300周年記念』2008年3月、帝京大学八王子校舎.
- ⑤ 岩井淳「ピューリタン革命と政教分離—市民革命の成果と限界」『愛知教育大学歴史学会大会(招待講演)』2007年11月23日、愛知教育大学.

[図書] (計6件)

- ① 木畑洋一・秋田茂編『近代イギリスの歴史』の富田理恵執筆部分『『権利の要求』とスコットランド近現代』ミネルヴァ書房、2011年、358(293-308を執筆).
- ② 岩井淳『ピューリタン革命と複合国家』山川出版社、2010年、90.
- ③ 川崎信文・森邊成一編『道州制 世界に学ぶ国のかたち』の山田園子執筆部分「複合国家イギリスの成り立ち」成文堂、2010年、245(85-105を執筆).
- ④ 深沢克己編『ユーラシア諸宗教の関係史論』の那須敬執筆部分『『クリスチャン』と『異端』のあいだ』勉誠出版、2010年、600(281-300を執筆).
- ⑤ 近藤和彦編『歴史的ヨーロッパの政治社

会』の富田理恵執筆部分「17世紀スコットランドにおける革命と政治社会—議会制定法の分析から」山川出版社、2008年、606(111-152を執筆).

- ⑥ 木畑洋一編『イギリス帝国と20世紀 第5巻 現代世界とイギリス帝国』の富田理恵執筆部分「連合王国は解体するか?—スコットランドとウェールズへの権限委譲」ミネルヴァ書房、2007年、385(95-127を執筆).

[その他]

ホームページ等

http://www.hiroshima-u.ac.jp/law/kyouin/yamada/p_324d58.html

<http://www.tokaigakuin-u.ac.jp/~tomita/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩井 淳 (IWAI JUN)
静岡大学・人文学部・教授
研究者番号：70201944

(2) 研究分担者

西村 裕美 (NISHIMURA HIROMI)
立教大学・コミュニティ福祉学部・教授
研究者番号：00290643

山田 園子 (YAMADA SONOKO)
広島大学・社会科学研究所・教授
研究者番号：10158199

菅原 秀二 (SUGAWARA SYUJI)
札幌学院大学・人文学部・教授
研究者番号：40216297

富田 理恵 (TOMITA RIE)
東海学院大学・人間関係学部・准教授
研究者番号：80322543

那須 敬 (NASU KEI)
国際基督教大学・教養学部・准教授
研究者番号：40338281

中川 順子 (NAKAGAWA JUNKO)
熊本大学・文学部・准教授
研究者番号：00324731

(3) 連携研究者

()

研究者番号：